

「読みやすい字を書こう」 —必然性をもたせた書字の指導を通して—

本実践に関連する児童生徒の実態

対象 中学生

○課題

- ・字を書く必要性を感じなければ、書く活動に取り組もうとしない。
- ・キャリアノートの記載を見ると、小学校低学年では読みやすい字を書いていたが、次第に書かなくなり、現在では筆圧もかなり弱く、読みづらい字を書いている。

○強み

- ・自分で決めたことは、比較的よく続けている。(筋トレ、健康観察、花の水やり、配りもの係)
- ・漢字検定を取得したいと思っている。

指導目標・指導仮説

・教科等及び単元名
自立活動「世羅中すごろくをつくらう」

目標(本実践終了時の期待する児童生徒の姿)
読みやすい字を書こうという姿勢が見られ、ノートやワークシートなどに文字を書くなどの活動に取り組むことができる。

指導仮説
来年度入学してくる後輩に楽しんでもらうためのものをつくるという、他者を意識した活動にすることで、相手に読みやすい文字を書くことができるだろう。

児童生徒の実態

指導仮説の具体的な内容と評価内容・方法

◆指導仮説の具体的な内容

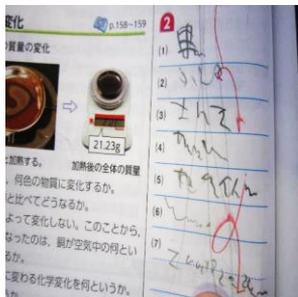
来年度入学してくる後輩に楽しんでもらうような「世羅中すごろく」にするためにどうしたらよいか考え、文字を丁寧に書くことの必要性を感じさせる。そして、後輩にとって読みやすい文字になっているかという視点で自分の書いた文字を見直すようにする。

◆評価方法(どのような方法で何を評価するか)

以前の文字との比較を行い、筆圧の強い、読みやすい文字になっているかを評価する。

指導の実際①

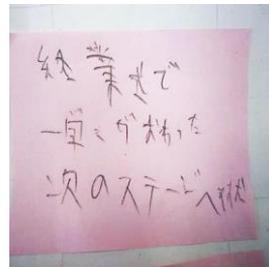
・自分の文字を読み直す活動



1学期に行った問題集の文字を提示したところ、自分でも読むことができなかった。

指導の実際②

後輩が読めるように、付箋に記入する。



後輩に楽しんでもらうす
ごろくにするためには、後
輩が読める文字にする必
要があることを確認した。
そして、筆圧を強く、バラ
ンスに気を付けて書くな
どのポイントを確認したり、
自分で読める字になっ
ているか振り返ったりしなが
ら、すごろくのマス(付箋)
に文字を記入した。

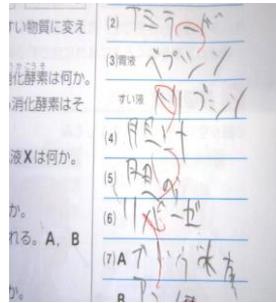
指導の実際③

実際にすごろくを行い、友達に読んでもらえる文字かどうかを確認する。



つくったすごろくを自分たちでやってみた後に、友達が楽しめるものになるよう、読みにくい文字を改善した。

指導の実際④



問題集に書いた文字とすごろくで書いた文字とを比較し、読みやすい文字になっているかどうか振り返り、よくなっているところについて評価をした。

実践前後での児童生徒の変容

実践前	実践後
筆圧が弱く、読むことができる文字がほとんどなかった。	読む人にとって読みやすい文字になっているか振り返りながら書くことで、筆圧が強くなり、読みやすい文字が増えた。学習に対する意欲も向上している。

評価

●児童生徒は目標を達成したか。
概ね達成した。

●判断の理由・根拠

日常の授業においても、筆圧の強い読みやすい文字が多くなっている。また、会話の中でも、「小学校の頃の方がきれいな字を書いている。」と、自分の書いたものについて評価する発言もあり、文字に対する意識が高まっていると感じる。

指導仮説の検証

●指導の成果

来年度入学してくる後輩のために、読みやすい文字であるかどうか客観的に見直しながらすごろくをつくることは有効であった。本生徒にとっては、読みやすい字を書く必要性を感じさせることが必要であったと考える。

●課題

読むことができる文字を書くようになったが、まだ字形の整った字とはいえない。今回は、生徒が文字を書く際の指導の多くが「声掛け」に留まっていた。ワークシートの工夫など、生徒の実態に応じたより具体的な手立てを考える必要がある。今後も、引き続き、文字に対するアドバイスと評価を行っていく。

指導の改善案

●成果・課題を踏まえた改善案

来年度入学してくる新入生に楽しんでもらうために、自分たちも楽しみながらすごろくをつくる中で、読みやすい文字を書く必然性が出たことは良かった。今後は、マス目のあるノートに書かせたり、小学生の頃の自分の字がなぜきれいなのか、そのポイントを考えさせたりするなど、字形が整った字を書くことができるよう指導していきたい。